

俳聖 松尾芭蕉



1 はじめに

古池や蛙飛び込む水の音

夏草や兵どもが夢の跡

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

これらは、芭蕉の句の中で私の好きな句である。なぜ好きなのかは自分でもわからない。なんとなく、句の中の情景を思い巡らすと、ころろと落ちていく。芭蕉は、自分が見た情景をそのまま句に表している。ころろと感ずるままの素直な句であり、蕉風といわれる作風の特徴である。

「俳聖松尾芭蕉」とは、どういう生い立ちを歩んできたのか。芭蕉の句自体の解説書は、数知れないほど出版されている。しかし、芭蕉が俳聖芭蕉といわれることになった生き様についてふれている書物は少ない。それは、記録自体があまり残っていないことに他ならないからである。本稿では、芭蕉の生き様を歴史的切り口で私見を書いていこうと思う。

2 伊賀上野での少年～青年時代

(1) 出生・家族構成等

宝暦12年(1762)に編纂された「竹人全伝」^{ちくじん}(注1)によると、芭蕉は寛永21年(1644)に伊賀上野の赤坂町に生まれた。元禄7年(1694)に没しているの、50年の生涯であった。

父は与左衛門、兄は半左衛門といい、他に母・姉・妹



奥の細道むすびの地(船町港跡)にある芭蕉(左)と木因(右)像

3人の計8人の家族構成である。芭蕉の本名は幼名金作長じて松尾忠右衛門宗房といった。不幸なことに、父の与左衛門は芭蕉が13歳の時没している。父の死が芭蕉の運命をも変える出来事になる。芭蕉が13歳の時父が没しているということは、長兄である半左衛門はおそらく20歳にもなっていないと思われる。到底、残された家族を兄一人で養うことは無理であったろう。

芭蕉の家は、諸説あるが農民の居住区にあったので、まず百姓を生業としていただろう。当時の農家の次男以下の者は余程の大百姓で無い限り土地を分与されることはなかった。当然、芭蕉の家も同様であったろう。このような境遇にあった者は、奉公に出るのが一般的であった。奉公には武家奉公と商家に住み込む丁稚奉公とがあったが、芭蕉は13歳の時武家奉公に出た。奉公先は藤堂新七郎家で5,000石の名家であった。

(2) 藤堂家へ武家奉公

藤堂家は、戦国大名藤堂高虎を藩祖とし、三重県の津に本城を構える32万石の大藩である。伊賀上野にも支城があった。芭蕉が藩主一門の藤堂新七郎家に奉

公でできたことは、しっかりした紹介者がいたに違いはないと思われる(紹介者については不明)。

この新七郎家には、藤堂主計良忠かづえ よし ただという名の跡継ぎがいた。芭蕉より2歳年上であった。良忠は学問が好きで、せん ぎん蟬吟という俳号を持っていた(良忠のことを以下蟬吟という)。はい かい俳諧の師匠は後に將軍徳川綱吉の歌の師匠となるきた もら き ぎん北村季吟(注2)(以下季吟という)である。蟬吟は2歳年下の芭蕉とは気が合ったので、自分専属の小姓とした。

当時の大名家の子弟は、簡単には自分の領国から出ることができなかった。よって芭蕉は蟬吟の詠った俳諧を添削してもらうため、京にいる季吟師匠のところに飛脚をしていた。そこで口頭などでの指導を受けたことを蟬吟に伝える役目をしていた。したがって、季吟師匠とも親しくなり、俳諧の指導も受けていたと思われる。これによって芭蕉も俳諧のおもしろさに目覚め、この道にのめりこんでいったのだろう。

また、蟬吟も大名家の子弟としての教養である漢詩・八代集(注3)・新勅撰集・源氏物語・伊勢物語・さ ころも狭衣等々を指導者に学び、芭蕉も小姓として仕えながら一緒に学んだと思われる。この時の勉強が、後の芭蕉の作風の基礎となり芭蕉の知識の幅を広げた。新七郎家に武家奉公をした結果、蟬吟という人に出会えたことが、芭蕉にとって貴重な財産になった。

(3) 蟬吟の死

ところが芭蕉が23歳の時、運命を大きく変える出来事が起きた。蟬吟の死である。寛文6年(1666)のことで25歳の若さで没したのである。元禄4年(1691)に刊行された「げん じゅう あんのき幻住庵記」の中で、芭蕉は「ある時は仕官懸命の地をうらやみ」と書いている。芭蕉は小姓とはいえ、奉公人で百姓の身分であったため士分になりたいと思っていたのは、偽らざる気持であった。また、蟬吟が長生きして家督を相続したならば、士分に取り立てられた可能性は多分にあっただろう。蟬吟が没したことによって、残念ではあるが芭蕉の願いは水泡に帰したのであった。

蟬吟の死後、芭蕉が何をしていたのかは記録がない。しかし、松尾家の経済事情を推察すれば藤堂家で奉公を続けなければならなかったであろう。蟬吟の死を機に芭蕉は小姓から台所役になったのである。

また、芭蕉は俳諧の新七郎家の縁で北村季吟と子弟関係を結べ、引き続き指導を受けられたのだろう。従って蟬吟亡き後も、季吟の指導を受け続けることで、かなり上達したのである。芭蕉は身分は低かったが、俳諧の世界で伊賀上野においては尊敬に値する立場であったと思われる。

当時、政治・経済の中心は江戸であり芭蕉も江戸へ出て、俳人との交流を望んでいた。江戸下向に際し、芭蕉は伊賀上野にある菅原神社に「貝おほひ」と名づけた作品を奉納している。菅原神社には、俳諧の神様でもあった菅原道真公を祀っている。芭蕉はこの菅原神社に江戸での成功を祈願して下向したのである。

「貝おほひ」というのは、貝あわせのように二つの句を合わせて勝負させたことに由来する。60句を左右に分けて30番とし、それぞれに優劣の判定と詞書きを添えたものになっている。また、芭蕉はこの「貝おほひ」を出版するため作品を持参して江戸に下向し、俳諧師として修行を積み自立をしようと考えていたのである。

3 江戸日本橋在住時代

(1) 江戸下向当初

芭蕉は、29歳で江戸へ下向すると、当初は日本橋本舟町の名主小沢太郎兵衛宅に入った。当時日本橋は豪商や旗本が多数居住している地区であった。伊賀上野から単身下向して借家といえどもそう簡単に住める居住区ではなかった。

小沢太郎兵衛は、北村季吟の門人(弟子)であったので、季吟から当面の世話依頼などがあったと思われる。日本橋は、多くの上級旗本や御用商人等が財の余裕さからか俳諧を含めた文芸も盛んな地域であった。毎晩のごとく、どこかの家で歌会やら連歌の会が開かれて

いた。芭蕉にとっては、格好の修行の場であり、人脈づくりの場でもあった。

芭蕉は、下向当初は門人もいないので当然俳諧師としての収入もない。小沢家の帳簿をつける帳役をして、生計を立てながら句会に参加していたと思われる。その後、小沢家のある本舟町に隣接する、小田原町（今の三越本店辺り）に居を移した。

そしてこの頃、生涯の援助者になる杉風と知り合うのである。杉風は幕府御用達の鯉屋という魚屋で、藤堂家の江戸の上・中・下屋敷にも出入りしている御用商人であった。私は芭蕉が江戸へ下向してからも、陰ながら藤堂家の威光の恩恵を受けていたと推察する。

(2) 俳諧師として立机

延宝2年（1674）芭蕉が31歳の時、北村季吟より連歌俳諧の秘伝書「埋木」の伝授を受ける。この「埋木」は、季吟が著した俳諧の作法書で、これを伝授されたということは、芭蕉に対して季吟は免許皆伝をした事になるのである。これで晴れて俳諧師として門人をとれる程の実力が認められたのだ。その後も季吟系等の俳人たち（貞門派）と交流し、この時分から奥州磐城平藩主内藤義概

（俳号風虎）の俳諧サロンにも、出入りできるようになっていた。

翌年、大阪から下向した西山宗因を歓迎する俳諧百韻が、奥州磐城平七万石藩主内藤義概の主催で催された。この西山宗因は、大阪に住み連歌俳諧の分野において天下の名士として聞こえていた。これに芭蕉が招かれたことは、江戸ですでに俳諧師として世間で認められ、有名にもなっていた証拠と推察できる。この百韻の会から芭蕉は、いままで使っていた宗房ではなく“桃青”という俳号を使うようになっている。

歌人でもあった松永貞徳が提唱したいわゆる貞門派といわれる人々（北村季吟・芭蕉等々）は、和歌のルールや雅を重んじた俳諧で、当時はこの貞門派の俳諧が主流であった。

西山宗因（1605～1682）は、俳諧に滑稽・俗言を積極的に取り入れ、貞門派のような難しいルールを簡素化したため、貞門派のそれと比べてより大衆に受け入れられるようになった。西山宗因の作風を取り入れた俳人集団を貞門派に対して談林派といった。この頃から、芭蕉の俳諧の作風は貞門風から談林風に傾倒していくのである。

解説

和歌と俳諧について

和歌

中国の漢詩に対し、「やまとうた（大和歌）」といわれ、上の句（五・七・五）と下の句（七・七）の31文字から成る日本固有の形式を持った詩のこと。中国の漢詩と区別するため日本固有の歌言葉の総称として名づけられた。和歌は、飛鳥時代・奈良時代・平安時代に最も隆盛を極めた。

連歌

連歌は連句ともいい、鎌倉時代から江戸時代に詠われた歌の形式。

発句…通常、宗匠がまず初めの五七五を詠う。これが発句。

脇句…発句に続けて、次の人が七七と付句を詠う。これが脇句。

発句、脇句を多数の人が順番に詠って楽しんだ。

和歌連歌

鎌倉時代から室町時代によく詠われた歌の形式。31文字で一首として完結する和歌古来の形式から、何人もの人のうち一人が上の句を（五・七・五）と詠い、別の人が下の句（七・七）を詠い繋げて、順繰り詠いつなげて和歌を連続させたもの。

延宝5年頃は、芭蕉は俳諧師だけの収入では生活できないため、小石川上水の浚渫作業しゅんせつの監督を務めていた。給金もかなり高額であったので、この頃やっと生活も安定してきた。

芭蕉はこの時期に宗匠として立机したと推定する。立机とは一人前の文台を持つことで門人もおおびらにとれることを意味し、現実に門人も増えたのである。当時は立机した際には、披露のために万句俳諧の興行を行うのが慣例で、大勢の俳人の参加を得て世間に認知されるのが一般的であった（あくまで通説である）。万句とは、百句で完了する連句を百巻集めて、一万句としたものである。この大規模な興行を芭蕉は成功させ一躍江戸俳壇の名士になったと思われる。この名声により芭蕉は延宝6年（1678）に、「桃青三百韻附両吟二百韻」つけたりようぎんに ひやくいんを刊行。また延宝7年（1679）には「桃青門弟独吟二十歌仙」を刊行している。

このような大作を刊行できるのは、万句俳諧の成功で門人が増えたこととともに、財政的にも出資者が現れ、出版元の協力もあったからと推察される。

4 深川芭蕉庵時代

談林俳諧は、その斬新な滑稽さと面白味が特徴であるが故に世間に受け入れられ大衆化した。しかし斬新さと滑稽さを常に追い求めなければならなかったため、7年から10年くらいで行き詰まりを見せ始めた。芭蕉は、談林俳諧の作風が滑稽さ・俗言を追い求め過ぎ民衆の受け狙いだけが先走ったため、談林俳諧という作風に魅力を感じなくなっていたのであろう。これ以降はもっと俳諧を文芸的にすべきであると芭蕉は考え、「侘び・さび」を取り入れた句を詠んでいくのである。

芭蕉は延宝8年（1680）37歳の時、繁華街の日本橋小田原町（現在の三越本店辺り）から、深川の深川元番所跡にあった門人杉風所有の生簀の番小屋に居を移したのである。どうして順風満帆のこの時期に、荒地とも思われる地に転居をしたのかは記録がなく定かではない。当時の深川という地はとても寂れていて、俳諧師として生活できるような地ではなかった。日本橋から遠くなることから、かなりの門人が芭蕉から離れていった。

俳諧連歌

室町時代後期には、連歌師山崎宗鑑（1465～1554）が、滑稽さやシャレなど軽妙なタッチの連歌を詠い始めた。これを「俳諧の連歌」と呼んだ。俳諧という言葉の元々の意味は「滑稽」とか「戯れ」という意味で、面白い滑稽な言葉や俗語を歌に織り込んだので、堅苦しさが残っている和歌の連歌に代わってその気軽さが受けて大変流行し始めた。

貞門派

江戸時代になると、歌人であり、連歌師でもある松永貞徳（1571～1653）が即興性を重視し、これまで以上に俗語・滑稽さなどを取り入れた「俳諧連歌」が流行した。この貞徳を中心とする一派を「貞門派」といった。

談林派

江戸時代も元禄時代になると、連歌師西山宗因（1605～1682）が、滑稽さを一段と取入れた。この宗因を中心とする一派を「談林派」といった。

蕉風

談林俳諧に「侘び・さび」を取入れた芭蕉の作風のことである。談林俳諧は本来滑稽・シャレをいれた言葉遊びの芸の位置づけであったが、芭蕉が文芸的要素を加味した。芭蕉は、連歌の発句の17文字の中にさまざまな情景・情感を表現しようとした。この連歌の「発句」五・七・五だけが独立して、「俳句」となった。

俳諧師としての収入は激減したはずであるが、それでもなんとか生活できたのは、残った門人杉風をはじめ、わずかの門人の経済的援助があったからである。日本橋に住んでいれば、おもしろく・おかしく生きられたはずである。しかし、俳諧師というのは身分も低く所詮金持ちの道楽遊びのお相手と感じ、厭になったのではないか。また、俳諧を戯れ事扱いされていた世間の風潮に対し、芭蕉の自尊心が許せなかったとも推察できる。

深川の小屋のことを「芭蕉庵」といったのは、門人が芭蕉の木を植えたことに由来する。そしてこの頃から、俳号も「桃青」とともに「芭蕉」を使うようになった。

深川移住後、近くに鹿島根本寺の二十一世住職の仏頂和尚と知り合い禅を学んだ。この出会いが、芭蕉のその後の人生観を変えることになった。作風も詩禅一致ともいうべき、物事を直感的にとらえることを学ぶのである。和歌を始め句の語句は、詠い手が直接見たものではなく、間接的に語句のイメージや季語として機械的に使われている作品が多いため、単なる言葉遊びの域を出ていない。そこで芭蕉は、実際に旅をして直接、山・谷などの自然を見て、その時感じた情感を句に表現すべきだ、と悟ったのではないかと思う。天和元年（1681）のことで芭蕉38歳の頃である。

そして、貞享元年（1684）芭蕉41歳の時、門人千里と共に、「野ざらし紀行」の旅に出たが、母が前年に没しているので墓参を兼ねての紀行であった。そのとき詠った句に

「野ざらしを心に風のしむ身哉」

がある。昔の旅は命がけだったのである。頭蓋骨を野に晒し死出の旅になることも覚悟した句である。この旅は、伊勢・吉野・大垣・桑名・熱田・伊賀上野（越年）・奈良・京都・大津・鳴海を旅し木曾路から甲州街道をへて深川に帰っている。9ヶ月の旅であった。

その後、貞享4年（1687）芭蕉44歳の時、「鹿島・笈おいの小文」の旅に出て、翌年の貞享5年（元禄元年に改元1688）芭蕉45歳の時「更科紀行」の旅に出ている。

そして元禄2年（1689）芭蕉46歳の時、芭蕉の代表作

「奥の細道」の旅に出るのである。門人である曾良そらを伴い六百里を五ヶ月で歩き貫き、たいへんな長距離を短期間で踏破した。多くの句を詠みながら短期間かつ長距離を踏破したことから、芭蕉の“忍者説”や“幕府隠密説”がある。この説が本当ならば謎めいていておもしろいと思う。

そして水の都大垣で旅を終えている。この旅のむすびの地大垣には、「奥の細道」の詳しい資料館として、平成24年4月8日に、大垣市船町の谷木因邸跡に「奥の細道むすびの地記念館」が新設オープンした。3D映像が取り入れられ、解説者も常駐して説明をしていただけるので、わかりやすい。ぜひお立ち寄りいただき、作品を鑑賞していただきたい。

芭蕉は、41歳から没するまでの10年間に、数多くの旅を重ね紀行集を残している。この頃から、彼は“俳聖 芭蕉”“旅の詩人”といわれるようになった。

芭蕉は旅を通して、諸行無常の境地に至り俳諧の世界では「不易流行」と「かるみ」の悟りを開眼したと思う。不易とは時代が変遷しても本質は永遠に変わらないものの意味、流行とは、時代とともに流動変化してゆくものの意味である。また、「かるみ」とは難解な言葉を排し、わかりやすい言葉で軽く詠む作風である。芭蕉の晩年はこの「かるみ」を重視した句を多く詠んでいる。

芭蕉は和歌・和歌連歌・俳諧連歌・貞門派連歌・談林派連歌と作風を変遷させ、最終的に蕉風という作風を創作したのである。この「作風」の変遷が、「不易流行」の実践を物語っている。



奥の細道むすびの地記念館

芭蕉の大垣訪問

- | | |
|-------------------------|---|
| 〈1回目〉
貞享元年
(1684) | 芭蕉は「野ざらし紀行」の旅に大垣に来遊の際、木因の家に宿泊している。このとき、1〜2週間ほど滞在したようである。 |
| 〈2回目〉
元禄元年
(1688) | 岐阜妙照寺住職「己百」とともに、妙照寺に1ヶ月滞在。赤坂の矢橋木因亭にも一泊している。芭蕉は木因亭にも立ち寄りその後、「更科紀行」へ出発している。 |
| 〈3回目〉
元禄2年
(1689) | このときの大垣訪問が、「奥の細道」むすびの地になった。このとき、大垣藩家老戸田如水と対面している。 |
| 〈4回目〉
元禄4年
(1691) | 森川昭著の「芭蕉と木因」に【京都から近江美濃を経て、途中垂井の本龍寺に宿泊し大垣の如行宛に書簡を送っている】と書かれている。 |

このようにして、木因や大垣藩士の俳人たちと芭蕉との交流は、大垣俳壇はいうまでもなく美濃俳壇にも大きく影響を与えている。

コラム 芭蕉と大垣の俳人谷木因とのつながり

谷木因は、大垣の船町という港町で船問屋を営んでいた、大垣俳諧の巨匠である。

芭蕉と谷木因は、師匠が同じ季吟であり、同門であった。しかしながら同じ机で一緒に指導を受けた訳ではなく、季吟門下であった頃はお互いに面識はなかったようだ。

木因と芭蕉が接点を持ったのは、天和元年(1681)35歳になった木因が江戸へ下向した折に、芭蕉(37歳)を訪ねて俳諧の会へ共に参加したのが始まりである。その後、木因はたびたび芭蕉に対し大垣へ来遊を促していたようであった。

森川昭著の「芭蕉と木因」に、【天和2年(1682)「鳶の評論」で芭蕉は、木因が機知にとんだ返答をしたため、門人で大垣藩士の中川甚五郎守雄(禄1000石 俳号濁子)につぎのように木因のことを激賞している。「杭瀬河之翁こそ予が思う所にたがわず、
とび いささ いつわり
 聊か偽彼翁」と書簡を送っている】と書かれている。

(注1) 藤堂元甫が、家臣川口維言竹人に命じて芭蕉の正確な伝記を作成させた書物。宝暦12年(1762)作成。

(注2) 北村季吟(1625〜1705)江戸時代前期の歌人・俳人。元禄2年より幕府歌学方を世襲。將軍の歌の師匠を勤めた。

(注3) 八代集とは、古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集・新古今集の八代の勅撰和歌集をいう。

(注4) 年齢はすべて数え年で表記。

〈参考文献〉

「芭蕉二つの顔」 田中善信著(講談社学術文庫)
 「芭蕉入門」 井本農一著(講談社学術文庫)

「芭蕉めざめる」 光田和伸著(青草書房)

「芭蕉」 田中善信著(中公新書)

「悪党芭蕉」 嵐山光三郎著(新潮文庫)

「松尾芭蕉」 佐藤勝明著(ひつじ書房)

「芭蕉ハンドブック」 尾形仿著(三省堂)

「芭蕉」 大星光史著(木耳社)

「芭蕉」 岡本勝著(中日新聞社)

「俳諧とその周辺」 森川昭著(翰林書房)

「俳諧から俳句へ」 佐藤泰正著(笠間書院)

「芭蕉の名句・名言」 石寒太著(日本文芸社)

「芭蕉と木因」 森川昭著(大垣市・大垣市教育委員会)